



Title	<30周年記念論文・感想文> 30年の遍歴
Author(s)	伊東, 一信
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

30年の遍歴

伊 東 一 信

意匠学会が今年30周年を迎えることは、まことに喜ばしいことである。創立当初から学会に所属してきた者の一人として、この30年間に於ける自らのデザイン制作の面についての遍歴の跡をたどってみたい。

私は今までに、色々な分野のデザインを作成してきたが、終始興味を持ち続けてきたのは壁面のデザインである。したがってこの小文に於ては、この分野のデザイン制作について、ふりかえてみたいと思う。

画面分割からの出発

最初に壁面構成の作品を作り始めたのは、1956年頃である。ベーシックデザインの方法の一つとして、「分割による構成」があるが、壁面のデザインを作成するに当って、先づこの方法によって壁面を構成してみようと思った。(図1)

壁面を直線もしくは曲線で分割して、色々な色彩で塗り分けるだけでは面白くないので、部分的に厚みに変化をつけてレリーフ状とした。材質は当時建築用材として製造されていた、ホモゲンホルツという板材を使い、塗料はカシューを用いた。

この作品は横1m、縦50cm程度の大きさのもので、これは直接壁面に取付けるためのものではなく、実際にはこれを10倍に拡大して、施工するための雛型のもつもりで制作した。

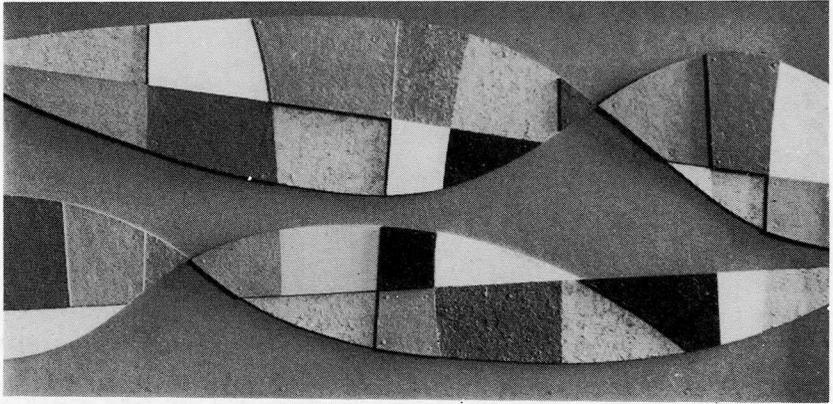


図1 壁面デザイン U

この他にも画面を分割して、布切れを貼りつけるコラージュの手法によるもの等、約2年の間に20点程の作品を制作したのであろうか。

私は壁面のデザインは単なる壁面装飾ではないと思っている。訴える力と魅力によって建築に生彩を与え、一つの雰囲気をかもし出すものでなければならぬだろう。したがって壁面のデザインを担当するものは、母体となる建築のデザインを良く理解し、融合をはかる必要があると思う。

オートマティズムへの傾倒

私は1961年頃になって、突如としてオートマティズムに惹かれ、マーブリングの仕事を始めた。仕事の内容としては、それまでのものとは180度の転換である。

マーブリングの技法は、日本では昔から墨流しとして知られていたものである。墨流しは墨汁を水面に流すのであるが、私はこれを油性のカシュー塗料で試みた。カシューは色彩が豊富なので、色彩感覚豊かな画面を得ることができた。(図2)

私はこの仕事も、壁面デザインの一環として制作したものであり、この作品

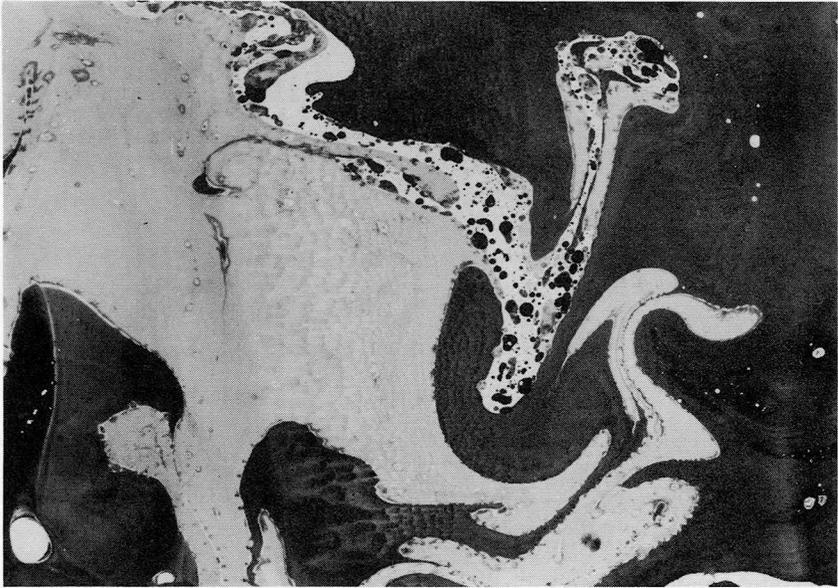


図2 壁面デザイン 64-1

自体は水槽の都合で、横50cm、縦35cm程度の大きさのものを作るのが精一杯であったが、これを壁面デザインとして使用する場合には、写真によって引伸し、樹脂加工によって耐久性を与えることにより、施工することができると考えた。この種の作品は、1961年から1966年までの間に、展覧会に出品したものだけでも50点を越えている。

曲線的な形態への魅力

1967年になって、私は曲線的な抽象形態に強い魅力を感じはじめた。夏の間に制作を進め、10月に最初の個展を開いて、曲線的形態のみ9点を展示した。

(図3)

当時、私は曲線的形態のもつやわらかさに限りない魅力を感じていた。曲線的な形態を生み出す喜びは、何物にもかえがたいものがあった。そして曲線的

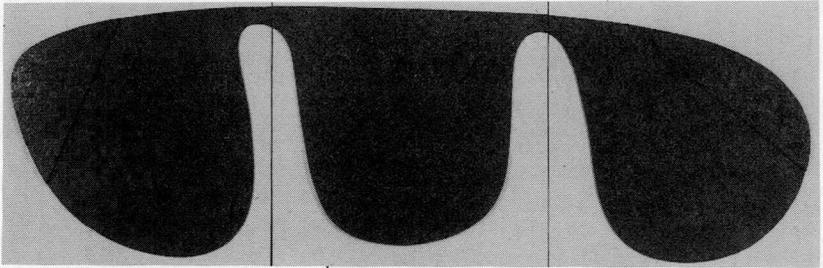


図3 壁面デザイン 67-7

な形態の場合には、自らの訴えようとする気持を、端的に表現できるような気がする。

図3の作品も材料はホモゲンホルツ板を使用し、カシュー塗料により着色したものである。大きさは横180cm、縦60cmであるが、これも10倍位の大きさのタイル張りの壁面を想定している。この後2年間は曲線的形態のとりことなり、1968年には第2回個展、翌年には第3回個展を開いて、合計25点の作品を展示した。

直線的な形態への転換

1970年、私は又、転機を迎えた。それまで曲線的形態に強く惹かれていた私は、この年になって、直線的な形態に魅力を感じはじめたのである。そしてその年、直線的な形態のみによる13点の作品をもって第4回個展を開催し、翌年には第5回個展に15点の作品を展示した。(図4)

曲線的な形態のもつ有機的な感触に対し、直線的な形態には、無機的な冷徹さがあるように思われる。そして又、直載という言葉がふさわしい感覚があるようにも思われるのである。

直線的な形態の作品を制作するようになってからは、材料もアクリル板を使うようになり、構造的には半立体の造形となった。アクリルの持つ透明感は、直線的形態にふさわしく、又、近代感覚をもつものであると思う。直線的な形

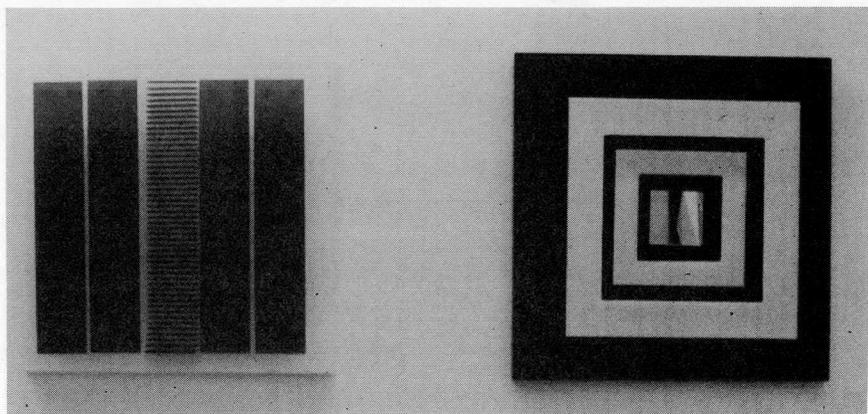


図4 壁面デザイン 510-511

態に対する魅力は、その後もおとろえることなく、以後5年程の間に20数点の作品を制作した。

曲線的形態への回帰

1975年頃になって、私は再び曲線的な形態に惹かれはじめて、数々の作品を制作した。1979年になって、京都教育大学に講堂が建設されることになり、その正面入口奥の横巾25m、高さ2.9mの壁面のデザインを依頼された。このデザインは1980年、意匠学会第22回大会のパネル発表に展示した「京都教育大学講堂壁面レリーフデザイン」である。(図5)

私はこれまでに、このような大きな壁面のデザインを作成したことはなく、又、壁面が非常に横長であるため、構図の点で非常に苦心した。このデザインは壁面の左下方より発生し、中央部分を水平に通り抜けて、右上方へ吹き上げる「上昇気流」を表現したものである。上昇気流とはすなわち京都教育大学の上昇発展を祈念するものであり、この大学に学ぶ若人達の限りなき躍進を願うという意味をこめたものである。

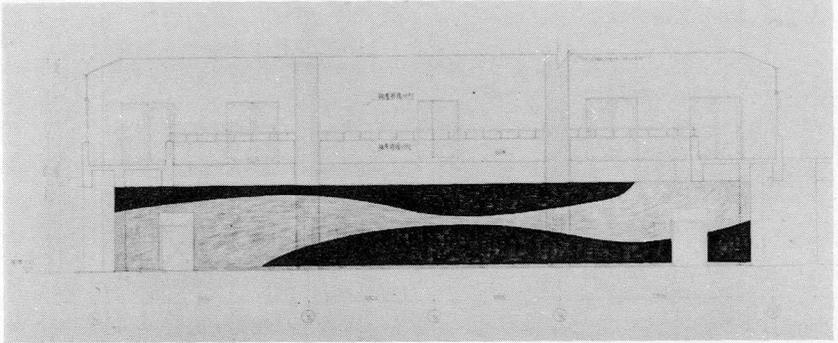


図5 京都教育大学講堂壁面デザイン

このデザインは実際に施工されて、翌1980年に完成した。施工に当って、この位の大きな壁面になると、レリーフの厚みのコンクリートの重量が相当なものとなり、初期の計画では厚さ12cmの凸出面を設ける予定であったが、これを10cm以下におさえなければならない結果となった。これはこのような大壁面のデザインを担当する際の良い経験になった。

そして、このように大きな壁面のデザインを担当することができたことは、これまで長らく続けてきた壁面デザインに対する研究の集大成であり、私自身にとっては記念的な作品である。

直線・曲線併用形態への発展

1982年頃から、直線と曲線を併用した形態に興味をもちはじめ、種々の作品を制作した。この種の作品の代表的なものとしては、1987年、意匠学会第29回大会のパネル発表に展示した「壁面レリーフデザイン 〈上昇〉」がある。(図6)

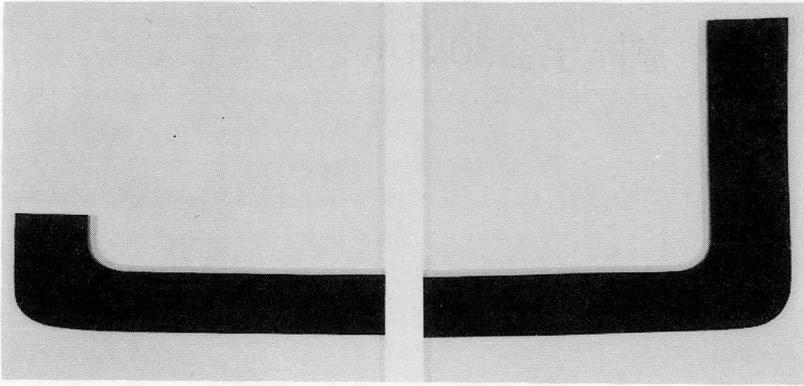


図6 壁面レリーフデザイン〈上昇〉

このデザインは公共建築の一壁面（4.5m×4.5m・2面）を想定し、その壁面レリーフデザインを試作したものである。テーマは「上昇」で、上昇発展を意味している。この作品は縮尺 $\frac{1}{8}$ の模型であるが、実際の施工に当っては、全面にボーダータイルを貼る予定である。

30年間の回顧

1956年頃から始めた私の壁面デザインについての研究は、30年を少し越えたことになるが、今も尚、その仕事を続けている。

私はモダニズムの中で育った。私が30年の間に制作してきたデザインは終始モダニズムの作品である。

近年、ポストモダニズムの風潮があるが、私はこれに転向しようという気持はない。モダニズムをもっと徹底的に追求してみたいからである。